青年期における対人恐怖的心性と対人不安の差異

—— 罪悪感による両概念の弁別 ——

大西将史¹ 神戸大学

Trait guilt discriminate between anthropophobic tendency and social anxiety in adolescents

Masafumi Ohnishi (*Kobe University*)

This study examined the role of trait guilt in discriminating between anthropophobic tendency and social anxiety. 212 University and technical college students (103 males and 109 females) were administered a questionnaire with a trait guilt scale, an anthropophobic tendency scale, and a social anxiety scale. Trait guilt showed a positive correlation with anthropophobic tendency when the influence of social anxiety was controlled. When the influence of Anthropophobic tendency was controlled, trait guilt did not correlate as highly with social anxiety. These results were discussed related to cultural views of the self. Japanese culture is a “shame culture” because interdependent view of the self (seeing themselves as essentially connected with others) is dominant. People worry about appearances and how others see them, and are ashamed of their own deficiency or negative side, which leads to a sense of betrayal of others and thus guilt becomes a prominent trait.

Key words: anthropophobic tendency, social anxiety, guilt, trait guilt, Japanese culture.

The Japanese Journal of Psychology

2008, Vol. 79, No. 4, pp. 351-358

対人恐怖と対人不安は、対人場面で生じる不安や恐怖であるという点など多くの共通点をもちつつ、その現象像や学問的背景などにおいて多くの差異がある。

対人恐怖は、森田（1932）が神経質の一つとして記載して以来、精神医学や臨床心理学といった臨床場面で主に議論が行われてきた概念である。対人恐怖には、赤面恐怖、視線恐怖、表情恐怖、醜形恐怖、自己臭恐怖といった様々な亜型があり、これらが対人場面において問題となり、他者からの否定的な評価を気にするという点で共通することから症候群（対人恐怖症）として命名されたものである。対人恐怖症は、一般的に、“他者と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのために他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係から出来るだけ身を退こうとする神経症の一型（笠原，1993）”と定義されるが、一般青年の性格傾向から精神病水準に至る様々な病理水準を含む複雑な概念であることが

指摘されている（笠原・藤縄・関口・松本，1972）。永井（1994）は、これらのうち、一般青年のもつ心理傾向を対人恐怖的心性としてこれを測定する尺度を作成し、様々な実証的知見を得ている。本研究においても、対人恐怖的心性を取り上げ、一般青年を対象に調査を行う。対人恐怖的心性を取り上げることで、青年期における自己の発達を理解する上で有用な実証的知見を得ることができ、さらにそれを通じて臨床場面における病理構造の理解につなげられると考えるからである。

ところで、対人恐怖は日本において特に多くみられることから、日本文化の特質を反映した問題としてこれまで多くの議論が行われている（土居，1971；河合，1975；近藤，1982；大野，2002；谷，1997）。この議論は、森田（1932）が対人恐怖について“恥ずかしがることをもって自らふがいないことと考え、恥ずかしがらないようにと苦心する負け惜しみの意地張り根性である”と述べ、対人恐怖を“恥の病理”と規定したことに端を発しており、その後 Benedict（1946 長谷川訳 2005）によって日本文化が“恥の文化”とされたことも関係している。Benedict（1946 長谷川訳 2005）の議論は表層的であるとして多くの反論が提出されたが（土居，1971；井上，1977；作田，1967），日本文化が恥の意識²によって特徴づけられるという主

Correspondence concerning this article should be sent to: Masafumi Ohnishi, Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657-8501, Japan (e-mail: okinawa1903@yahoo.co.jp)

¹ 本論文作成にあたり、ご指導いただきました神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授谷冬彦先生に深く感謝致します。

張は多くの論者に受け入れられている。実際に、対人恐怖における恥の意識と日本文化的特質を関連づけて考察する研究は少なくない(近藤, 1982; 中村, 1994; 大野, 2002; 谷, 1997)。例えば近藤(1982)は、他人の目や世間の評価に対して恥じることをないように行動することが日本における規範になっていることを指摘している。また、小川・林・永井・白石(1979)による比較文化研究において、アメリカ人青年に比較して日本人青年は対人恐怖的心性が高いことが示されており、上の議論を傍証するものと考えられている。さらに、谷(1997)は、対人恐怖的心性が日本人青年において多く自覚されることについて、文化的自己観(Markus & Kitayama, 1991)という概念を用いて説明するモデルを構成し、それを実証している。谷(1997)によると、日本文化では、個人は本質的に他者と結びついているという相互協調的自己観が優勢であるため、“個”としての自己と“関係”の中での自己の統合過程であるアイデンティティ危機において“個”-“関係”の葛藤をともなう。そして“関係”への志向性によって、“個”としての自己を発揮できないという自律性の反面である恥の意識を生み出し、対人恐怖的心性が生じてくるという。このように対人恐怖は、恥の意識と対人関係を重視する日本文化の特質とが密接に関係しながら生じてくると考えられよう。

これに対して対人不安は、欧米を中心として、臨床心理学領域に加えて社会心理学領域で議論が行われてきた概念であり、“現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態”と定義される(Shlenker & Leary, 1982)。対人不安は、これまで、対話懸念(communication apprehension)、デート不安、シャイネス(shyness)、あがり(stage-fright)、困惑(embarrassment)、などの異なる用語で記述されていた現象が、いずれも対人場面において経験する不安であるという点で共通することから Leary(1983 生和監訳 1990)によって統合された概念である。対人不安は、一般的な対人的問題として精神病理であるという位置づけはなされていないが(Leary, 1983 生和監訳 1990; Leary & Kowalski, 1995)、対人不安が慢性的で重度になった場合、すなわち対人不安を経験しやすい特性が社会生活を妨げるほどに高い場合、DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994 高橋・大野・染谷訳 1996)における社会恐怖(social phobia)あるいは社会不安障害(social anxiety disorder)

と)同様の病態とみなし、社会恐怖を病理的な水準にある対人不安とする捉え方がある(Leary, 1983 生和監訳 1990)。このように、対人不安においても、一般人の心理傾向から臨床的介入の必要な病理水準のものまで存在するといえる。本研究においては、前述した対人恐怖の場合と同様に、健康者の心理傾向としての対人不安傾向を取り上げる。

上の定義にみられるように、他者からの評価に接することが対人不安を引き起こす要因となっているが、それは特に否定的な評価が問題となっており、したがって対人不安においても、他者から否定的に評価されるのではないかという恥の意識がその中心にあると考えられる。実際に Leary(1983 生和監訳 1990)は、対人不安の特徴を記述する際に、否定的評価にとまらぬ不安を取り上げている。また、前述した社会恐怖の診断的特徴にも恥をかくことへの恐怖が挙げられている。このように対人不安や社会恐怖においても恥の意識が中心の問題となっているが、対人恐怖にみられるような特定の文化との関連を指摘する議論は存在せず、どの文化圏においても共通して存在する対人的問題と考えられている。

これらの議論から、対人恐怖と対人不安には、対人場面で生じる恐怖や不安である点、健康者の心理傾向から病理水準のものまで存在する点、他者から否定的に評価されるのではないかという恥の意識が問題となっている点において共通していると考えられる。その一方で、対人恐怖が日本文化的特質と結びつけられて論じられるのに対して、対人不安にはそのような議論がなく、普遍的な対人的問題と捉えられているという顕著な相違点も認められる。本研究では、これとも関連する相違点として、次の点に着目する。すなわち、対人恐怖においては、前述した定義にもみられるように、他人に不快な感じを与えるのではないかと、自分の存在や欠点が他者に迷惑をかけるのではないかという罪の意識が特徴的にみられるという点において、対人不安と大きく異なっているのである。この議論は、対人恐怖症と社会恐怖の差異に関する議論においてこれまで多くの研究者によって取り上げられている(笠原, 2005; 中村, 1994; 大野, 2002; 里村, 1979; 谷, 1997; 内沼, 1977, 1990)。例えば谷(1997)は、対人恐怖症には他者からの評価懸念だけでなく、他者に不快な感じを与えて迷惑をかけることへの懸念に伴う不安という側面が、欧米でみられる社会恐怖との違いであることを指摘している。これに関しては、DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994 高橋他訳 1996)の“文化に結びついた症候群(culture-bound syndromes)”の中に、日本における文化固有の社会不安障害として“taijin kyofusho(対人恐怖症)”の記載があり、他者への加害感が特徴的であるとされている。また、対人恐怖の代表的な研究者である内沼

² 本研究における恥の意識とは、困惑や羞恥などの欧米における embarrassment に相当する感情(有光, 2001; 菅原, 1998)や、恥や恥辱感、屈辱感などの欧米における shame に相当する感情(有光, 2001; 菅原, 1998)などを含むが、これらの中でも特に、自己評価の低下にともなう否定的な感情である後者の感情(shame)に力点を置いている。

(1977, 1990) は、対人恐怖症において、病理水準の上昇と平行して対人場面で問題となる感情が、羞恥から恥辱へ、さらに罪悪感へと推移することを指摘し、恥の意識と罪の意識の複雑な関係を論じている。

以上の議論から、対人恐怖の心性と対人不安の差異は、他者に対して不快な感じを与えて迷惑をかけてしまうという罪悪感によって最も特徴づけられるといえる。本研究の目的は、一般青年を対象とした調査を行い、このことを実証することである。対人恐怖の心性と対人不安について、恥と罪悪感という観点から実証的に検討した研究が存在しないため、本研究を通じて、これらを、文化的視点を踏まえた自己の構造という新たな角度から理解できるものと考ええる。なお、罪悪感については、感情としての罪悪感ではなく、罪悪感を感じることに関するパーソナリティ特性を意味する特性罪悪感 (trait guilt; 大西, 2008) という概念を取り上げる。特性罪悪感に着目することで、罪悪感の個人差についてパーソナリティという観点からアプローチできるため、本研究に適していると思われる。また、これまで様々な特徴をもつ複数の特性罪悪感が存在することが指摘されており (大西, 2008), それらによって対人恐怖の心性および対人不安との関連構造も異なると考えられるため、これについてもあわせて検討を行う。

方 法

調査協力者

近畿圏の大学生および専門学校生 212 名 (男性 103 名, 女性 109 名, 平均年齢は 19.69 歳, $SD=1.28$, 範囲は 18—24 歳) に調査協力を得た。

測定尺度

特性罪悪感尺度 “特性罪悪感尺度 (Trait Guilt Scale)” は、罪悪感を感じることに関するパーソナリティ特性を測定することを目的として大西 (2008) によって作成された尺度である。他者よりも自分の方がいい思いをしているという不均衡の感覚による罪悪感である“利得過剰の罪悪感 (7 項目)”, 精神内における漠然とした罪悪感である“精神内の罪悪感 (7 項目)”, “甘え”とその不満による“恨み”のアンビバレンスから生じる罪悪感である“屈折的甘えによる罪悪感 (6 項目)”, 相手との関係を乱すことへの懸念による罪悪感である“関係維持のための罪悪感 (6 項目)” の 4 下位尺度 (合計 26 項目) から構成される。大西 (2008) によって、安定した 4 因子構造をもち、信頼性と妥当性があることが確認されている。“全くない”, “まれにある”, “時々ある”, “しばしばある”, “いつもある” の 5 段階 (1—5 点) で評定を求めた。

対人不安尺度 対人不安の測定には、心理傾向とし

Table 1
各尺度の平均値 (SD) および α 係数

	M	α 係数
特性罪悪感	61.28 (17.47)	.936
利得過剰	13.17 (5.07)	.886
精神内の	14.87 (6.33)	.911
屈折	16.54 (5.30)	.870
関係維持	16.70 (5.67)	.905
対人恐怖	59.08 (13.23)	.846
対人不安	92.89 (20.99)	.938
聴衆不安	20.27 (5.69)	.880
交渉不安	23.75 (5.77)	.867
集団不安	14.66 (4.90)	.854
長上不安	16.92 (5.16)	.850
異性不安	17.29 (5.84)	.896

での対人不安を多次元から測定する陳・谷 (2004) による“対人不安尺度”を用いる。陳・谷 (2004) は、Leary (1983 生和監訳 1990) の議論にもとづいて対人不安概念を整理し、“聴衆不安 (6 項目)”, “交渉不安 (7 項目)”, “集団不安 (6 項目)”, “長上不安 (6 項目)”, “異性不安 (6 項目)” の 5 下位尺度 (合計 31 項目) から尺度を構成している。対人不安尺度は、対人恐怖の心性との間に弁別性があることが確認されており、本研究に最も適した尺度であると考えられる。“あてはまらない”, “ややあてはまらない”, “どちらともいえない”, “ややあてはまる”, “あてはまる” の 5 段階 (1—5 点) で評定を求めた。

対人恐怖の心性尺度 対人恐怖の心性の測定には、永井 (1994) による“対人恐怖の心性尺度”の中で、他者に迷惑をかけてしまうことへの懸念についての項目が含まれており、対人恐怖の心性の特徴を最もよくあらわしていると思われる“関係の自己意識尺度 (14 項目)”を用いた。“全くあてはまらない”, から“非常にあてはまる”までの 7 段階 (1—7 点) で評定を求めた。

調査手続きと調査時期

上記の 3 種の尺度を含む質問紙を講義中に配布し、集団的に実施した。調査時期は 2007 年 6 月であった。

結 果

基礎統計量と信頼性係数

各尺度の基礎統計量と信頼性係数を Table 1 に示した。いずれの尺度においても、 α 係数は十分な値を示しており、この後の分析に使用可能であると判断した。

Table 2
特性罪悪感と対人恐怖の心性および対人不安傾向の相関

	特性罪悪感					対人恐怖
	全体	利得過剰	精神内的	屈折	関係維持	
対人恐怖	.554***	.294***	.603***	.339***	.453***	—
対人不安	.381***	.171*	.434***	.146*	.400***	.510***
聴衆不安	.308***	.105	.348***	.144*	.332***	.457***
交渉不安	.274***	.104	.338***	.107	.273***	.365***
集団不安	.312***	.121	.368***	.062	.382***	.389***
長上不安	.323***	.195**	.305***	.165*	.328***	.344***
異性不安	.251**	.136**	.309***	.079	.234**	.369***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

特性罪悪感、対人恐怖の心性および対人不安の相関関係

特性罪悪感と対人恐怖の心性および対人不安の相関係数を Table 2 に示した。特性罪悪感と対人恐怖の心性は、特性罪悪感全体において .554 と比較的高い正の相関 ($p < .001$) を示し、関連性が高いことが示唆された。下位尺度ごとにみていくと、精神内的罪悪感との相関が最も高く (.603)、次いで関係維持のための罪悪感 (.453)、屈折の甘えによる罪悪感 (.339)、利得過剰の罪悪感 (.294) という順で、いずれも 0.1% 水準で有意な正の相関を示し、関連していることが示唆された。

次に特性罪悪感と対人不安傾向については、まず対人不安全体に着目すると、特性罪悪感全体とは .381 と中程度の正の相関 ($p < .001$) を示した。特性罪悪感の下位尺度ごとにみていくと、精神内的罪悪感と関係維持のための罪悪感が中程度の正の相関を示した (それぞれ .434, $p < .001$, .400, $p < .001$)。これに対して、屈折の甘えによる罪悪感と利得過剰の罪悪感、5% 水準で有意な正の相関を示したものの (それぞれ .146, .171)、値が小さくあまり関連しないことが示唆された。

対人不安の下位尺度ごとにみていくと、特性罪悪感全体とはそれぞれ .251— .323 の有意な正の相関を示しており弱い関連を示すものの、下位尺度による相関の違いはそれほど明確ではなかった。精神内的罪悪感においても同様であり、全般的に 0.1% 水準で有意な正の相関を示した (.305— .368)。関係維持のための罪悪感においては、集団不安との相関が最も高く (.382, $p < .001$)、異性不安との相関が最も低い (.234, $p < .01$) という結果であり、対人不安の下位尺度によって若干の差異がみられた。利得過剰の罪悪感と屈折の甘えによる罪悪感については、対人不安の各下位尺度との間に正の相関を示すものの、いずれも値が小さく関連性が低いことが示唆された。

最後に対人恐怖の心性と対人不安の相関については、対人不安全体との間に .510 と比較的高い正の相関 ($p < .001$) を示し、関連性が高いことが示唆された。対人不安の下位尺度との間には、いずれも 0.1% 水準で有意な相関を示し、聴衆不安とが最も高い値であった (.457)。他の下位尺度とは .344— .389 と中程度の正の相関を示していたが、下位尺度による差異はそれほど明確ではなかった。

対人不安を統制した場合の特性罪悪感と対人恐怖の心性の偏相関および、対人恐怖の心性を統制した場合の特性罪悪感と対人不安の偏相関

対人恐怖の心性と対人不安との間に比較的高い正の相関がみられたことから、両概念と特性罪悪感との相関について、片方の影響をそれぞれ統制する偏相関を算出した (Table 3)。これにより、対人恐怖の心性と対人不安の共変量の影響、すなわち共通要素の影響を統制した上で特性罪悪感との関係を検討することができる。なお、対人不安の下位尺度については、単相関において他の変数との関係にそれほど明瞭な差異がみられなかったことから、全体尺度の得点のみを分析対象とした。その結果、対人不安を統制した場合の特性罪悪感全体と対人恐怖の心性は、.452 と比較的高い正の相関 ($p < .001$) を示したのに対して、対人恐怖の心性を統制した場合の特性罪悪感全体と対人不安は、.138 と 5% 水準で有意な正の相関ではあるものの、値が低かった。この結果から、対人恐怖の心性と対人不安の共通要素の影響を統制した場合、特性罪悪感全体は対人恐怖の心性とより関連していることが示唆された。

次に特性罪悪感の下位尺度についてみていくと次のような結果が得られた。まず、利得過剰の罪悪感、対人恐怖の心性とは .244 と値は低いものの、0.1% 水準で有意な正の相関を示したのに対して、対人不安とはほぼ無相関であった (.026)。次に、精神内的罪悪感、対人恐怖の心性との間に .492 と比較的高い正の

Table 3
対人不安を統制した場合の特性罪悪感と対人恐怖の心性の相関および対人恐怖の心性を統制した場合の
特性罪悪感と対人不安の相関

	特性罪悪感				
	全体	利得過剰	精神的	屈折	関係維持
対人恐怖 ^{a)}	.452***	.244***	.492***	.311***	.316***
対人不安 ^{b)}	.138*	.026	.185**	-.033	.220***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

^{a)} 対人不安の影響を統制している

^{b)} 対人恐怖の心性の影響を統制している

相関 ($p < .001$) を示したのに対して、対人不安とは .185 と 1% 水準で有意な正の相関であるが、それほど高い値ではなかった。さらに、屈折的甘えによる罪悪感においては、対人恐怖の心性とは .311 の正の相関 ($p < .001$) を示したのに対して、対人不安とは -.033 とほぼ無相関であった。これらの結果から、対人恐怖の心性と対人不安の共通要素の影響を統制した場合、利得過剰の罪悪感、精神的罪悪感、屈折的甘えによる罪悪感、対人恐怖の心性とより関連していることが示唆された。これに対して、関係維持のための罪悪感においては、対人恐怖の心性とは .316、対人不安とは .220 と、両方に 0.1% 水準で有意な正の相関を示しており、両方の概念と関連があることが示唆された。

考 察

特性罪悪感と対人恐怖の心性および対人不安の関係

本研究の結果から、特性罪悪感全般には、対人恐怖の心性とより関連が高く、対人不安との関連は低いということが明らかになった。このことは、対人恐怖の心性と対人不安は相互に高い関連性をもちながらも、特性罪悪感によって両者が弁別されることを示すものであり、両概念の差異を、“他者に不快な感じを与えて迷惑をかけるのではないかと懸念に伴う不安による”とする谷 (1997) の指摘や、多くの臨床家による同様の指摘を実証するものといえよう。また、特性罪悪感が対人不安と正の相関を示したのは、対人恐怖の心性との相関を介しての擬相関によるものと考えられる。特性罪悪感尺度の下位尺度に着目すると、両概念との関連性に下位尺度による差異がみられたため、以下では、それぞれの特徴を示しながら考察を行う。

まず、精神的罪悪感、対人恐怖の心性と対人不安の両方とも最も高い値の有意な正の相関 (それぞれ .603, .434) を示し、両概念の共通要素の影響を統制した偏相関において、対人恐怖の心性とは有意な正の相関 (.492) を維持したのに対して、対人不安とは有意ではあるもののあまり高い相関 (.185) を示さなかった。このような関係がみられたことについては、次

のように考えられる。すなわち、精神的罪悪感、精神分析理論で仮定される無意識的な罪悪感であり、他者との関係の中で自分を積極的に表現することや自ら何かを決めてやろうとすることに対して漠然とした罪悪感を感じてしまうというものである (Erikson, 1959 小此木訳 1973)。そこには、自分は自ら決めて何かをしたり自分の能力を発揮したりしてはいけない罪深い存在であるという、自己の存在すら否定してしまう感覚が背後に存在し、自分が他者と関係したり、他者の前に存在することが不当に他者を傷つけているという考えに結びついてしまうために、対人恐怖の心性と高い関連を示したものと解釈される。このことは、対人恐怖症者が自らを犯罪者であるとか自分がいるだけで悪い、などと述べ、自己存在への罪の意識が他者に対する加害意識へと結びつくという内沼 (1990) の指摘とも一致する。また、精神的罪悪感、特性罪悪感の中で抑うつと最も高い相関 (.470) を示し (大西, 2008)、きわめて不合理で病理的な罪悪感であることから、対人恐怖の心性と最も高い相関を示したものと考えられよう。

次に、屈折的甘えによる罪悪感も精神的罪悪感と比べると相対的には値が低いながらも、対人恐怖の心性との間に有意な正の相関 (.339) を示していた。しかし、対人不安との相関 (.146) は低く、偏相関においては、対人恐怖の心性とは有意な正の相関 (.311) を示したのに対して、対人不安とはほぼ無相関 (-.033) になり、両概念を弁別するものと考えられた。屈折的甘えによる罪悪感、土居 (1971) の“甘え”理論にもとづく罪悪感であり、他者との関係の中で“甘え”が満たされないことの不満により他者を“恨み”、“敵意”を示していたが、“甘え”と“恨み”がアンビバレンスの関係にあるために、“敵意”はその反面である“罪悪感”を導くという特徴を有している (大西, 2008)。つまり、他者に対して攻撃的な態度をとった後で反省し罪悪感が生じるというもので、他者に対する加害感という罪の意識が明確に存在するため、偏相関において対人恐怖の心性とのみ有意な正の相関を示したと解釈できよう。

さらに、利得過剰の罪悪感、対人恐怖の心性およ

び対人不安との間には他の下位尺度と比較すると高い値ではないが有意な正の相関（それぞれ .294, .171）を示した。しかし、偏相関においては、対人恐怖的心性とは有意な正の相関（.244）を示したのに対して対人不安とはほぼ無相関（.026）であり、対人恐怖的心性との関連は高くないものの、両概念を弁別するものと考えられた。利得過剰の罪悪感、他者よりも自分のほうが良い思いをしているのではないかという不均衡の感覚にもとづく罪悪感であり、自らが直接他者に対して迷惑をかけたわけではないために、対人恐怖的心性における他者への被害懸念とそれほど関連しなかったと考えられる。また、偏相関において対人不安とほぼ無相関であったことも同様に、自ら直接他者に対して迷惑をかけているわけではないため、他者からの否定的評価を受けるのではないかという不安と結びつかなかったのだと考えられよう。

最後に、関係維持のための罪悪感、対人恐怖的心性および対人不安と比較的高い有意な正の相関（それぞれ .453, .400）を示したが、両概念との相関にそれほど差はみられなかった。偏相関においても、いずれとも 0.1%水準で有意な正の相関（それぞれ .316, .220）を示し、両概念を弁別するものではないことが示唆された。この結果については、次のように考えることができる。すなわち、関係維持のための罪悪感、相手との関係の中で、わだかまり、気がねして、正しいと思うことに対しても、それが他者との関係を壊してしまうのではないかという懸念として罪悪感が生じるというものである（大西，2008）。そしてそのような罪悪感が、他者に対して迷惑をかけているのではないかという対人恐怖的心性における懸念と重なり、比較的高い相関を示したと解釈できる。また、このように罪の意識が顕著に他者へと向かうとともに、他者に申し訳ないと思ながらもそのような自分を他者が否定的に評価するのではないかという不安が伴うために対人不安とも関連したのだと考えられる。すなわち、関係維持のための罪悪感においては、罪の意識が他者へと向かうとともに、他者からの批判的なまなざしとして自己へと回帰するものと考えられるのである。これに関しては、関係維持のための罪悪感が、共感性の視点取得と正の相関（.254）を示しながらも、自己志向的な共感性である個人的苦痛とより相関（.321）が高いことから、苦痛な状況にある他者の立場に立ってその苦痛を自ら引き受けてしまうという特徴を示すこと（大西，2007）とも符合する。

日本文化の特質と罪悪感の関係

以上のように、特性罪悪感が対人恐怖的心性と対人不安を弁別する上で重要な役割を担っていることが示唆された。このことは、“恥の文化”と指摘された我が国において（Benedict, 1946 長谷川訳 2005）、最も

文化的特質を反映した対人的問題であると考えられてきた対人恐怖が、“罪の文化”において顕著な特質であるはずの罪悪感によって最も特徴づけられるということをも示唆している。

このように一見矛盾する事態については、文化心理学の議論を援用し自己の構造の差異という観点から以下のように考えることができる。すなわち、北山（1998）によると、相互独立的自己観が優勢な欧米文化においては、自己は本質的に他者と切り離された独立した実態である。そのため、自己存在の欠点や否定的側面は自己だけの問題であり、それがそのまま他者に迷惑をかけるといった否定的影響をもつものとは考えられない。すなわち、欧米文化における罪の意識は、他者と独立した自己と内的な道徳的規範との関係において体験されるものであり、相対的には自己内において完結するものである。これに対して、相互協調的自己観の優勢な日本文化においては、自己は他者と根源的に結びついた本質的に関係志向的な存在であり、他者との関係が自己を規定する。そのため、自己存在の欠点や否定的側面は自己だけの問題ではありえず、それは自己とつながる他者へと向かう。すなわち、日本文化における罪の意識は、自己と内的な道徳的規範との関係において体験されるという点では共通するものの、自己や道徳的規範そのものが根源的に他者と結びついているため、相対的には自己内だけで完結しえず、他者に対する裏切りとして体験される。そして裏切りの心理は罪の意識に直結しているため（土居，1971）、自己存在の欠点や否定的側面が他者に迷惑をかけているのではないかという“罪の意識”に結びつくと考えられるのである。なお、このような罪悪感と自己の構造の関係は、木村（1972）が、ドイツにおいてはメランコリー（うつ病）患者が自己志向的な罪の意識を訴えるのに対して、日本においては、他者志向的な罪の意識を訴えると指摘していることも符合する。

このように日本文化においては、本質的に他者と結びついた自己構造をもつがゆえに、罪悪感の様相が欧米と異なっている。このことは、欧米における shame と guilt がその機能において明確に分離できることを主張する Tangney の議論（Tangney & Dearing, 2002）をそのまま日本文化に適用することに疑問を投げかけるものである。これに関連して、薊（2006）は、欧米における shame と guilt の概念が、日本における恥と罪悪感の概念に必ずしも対応していないことを実証的に明らかにしており、薊（2006）の知見は以上の議論を傍証するものと考えられよう。

以上の考察から、他者と根源的に結びついた自己の構造をもつがゆえに、“恥の文化”とされる日本文化においては、他者への裏切りの心理としての罪悪感が顕著であると結論づけられる。

今後の展望

本研究の結果は、日本人青年において、対人恐怖の心性と対人不安が高い関連を示しながらも特性罪悪感によって弁別されることを示唆しており、文化普遍的な対人的問題である対人不安に、他者と根源的に結びついた自己の構造をもつという日本文化的特徴が加わることで、対人恐怖の心性が生じると考えることができるかもしれない。この点について、さらなる検討を行うことが今後の課題として挙げられる。また、本研究では、対人恐怖の心性について日本文化における自己の構造と特性罪悪感という観点からその特徴を記述したが、対人恐怖の心性は、それらに加えて青年期における自我同一性形成と密接に関係しながら生起するものであるため（谷，1997）、今後はそのような観点を加えた研究を行う必要があるだろう。本研究における議論はあくまで日本人青年を対象とした調査データにもとづくものであるため、相互独立的自己観の優勢な欧米文化圏におけるデータを収集し、本研究の結果や、上述した課題について、比較文化研究を行うことも必要であろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (Ed.) (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. (DSM-IV)*. 4th ed. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- （アメリカ精神医学会（編）高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）（1996）。DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）
- 有光興記（2001）。罪悪感、羞恥心と性格特性の関係性心理学研究，**9**, 71-86.
- （Arimitsu, K. (2001). Guilt, shame/embarrassment, and their personality correlates. *Japanese Journal of Personality*, **9**, 71-86.）
- 薊理津子（2006）。恥と罪悪感の機能についての検討——Tangney の shame, guilt 理論を基に—— 聖心女子大学大学院論集，**19**, 197-216.
- （Azami, R.）
- Benedict, R. (1946). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin.
- （ベネディクト，R. 長谷川松治（訳）（2005）。菊と刀——日本文化の型—— 講談社）
- 陳 愛玲・谷 冬彦（2004）。新たな多次元対人不安尺度の作成に関する研究 日本心理学会第 68 回大会発表論文集，273.
- （Chin, A., & Tani, F.）
- 土居健郎（1971）。“甘え”の構造 弘文堂
- （Doi, T. (1973). *The anatomy of dependence*. Tokyo: Kodansha.）
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company.
- （エリクソン，E. H. 小此木啓吾（訳編）（1973）。自我同一性 誠信書房）
- 井上忠司（1977）。世間体の構造——社会心理史への試み—— NHK ブックス
- （Inoue, T.）
- 笠原敏彦（2005）。対人恐怖と社会恐怖——診断と治療の指針—— 金剛出版
- （Kasahara, T.）
- 笠原 嘉（1993）。対人恐怖 加藤正明・笠原 嘉・小此木啓吾・保崎秀夫（編）新版精神医学事典 弘文堂 p. 515.
- （Kasahara, Y.）
- 笠原 嘉・藤縄 昭・関口英雄・松本雅彦（1972）。正視恐怖・体臭恐怖——主として精神分裂病との境界例について—— 医学書院
- （Kasahara, Y., Fujinawa, A., Sekiguchi, H., & Matsumoto, M.）
- 河合隼雄（1975）。自我・羞恥・恐怖——対人恐怖の世界から—— 思想，**62**, 23-28.
- （Kawai, H.）
- 木村 敏（1972）。人と人との間 弘文堂
- （Kimura, B.）
- 北山 忍（1998）。自己と感情——文化心理学による問いかけ—— 共立出版
- （Kitayama, S.）
- 近藤喬一（1982）。対人恐怖の日本の特性 臨床精神医学，**11**, 837-842.
- （Kondo, K.）
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. California: Sage.
- （リアリー，M. R. 生和秀敏（監訳）（1990）。対人不安 北大路書房）
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1995). *Social anxiety*. New York: Guilford Press.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 森田正馬（1932）。赤面恐怖（又は対人恐怖）と其療法 神経質，**3**, 172-184.
- （Morita, M.）
- 永井 徹（1994）。対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析—— サイエンス社
- （Nagai, T.）
- 中村 敬（1994）。Social Phobia と対人恐怖症——文献およびカナダ人自験例についての予備的考察—— 精神医学，**36**, 131-139.
- （Nakamura, K. (1994). Social phobia and taijinkyofu-sho: A preliminary study on the literature and Canadian cases of social phobia. *Clinical Psychiatry*, **36**, 131-139.）
- 小川捷之・林 洋一・永井 徹・白石秀人（1979）。対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(1)——比較文化的観点から—— 横浜国立大学教育紀要，**19**, 205-220.
- （Ogawa, K., Hayashi, Y., Nagai, T., & Shiraishi, H. (1979). A study of negative self-awareness in interpersonal relationships, characteristic of anthropo-

- phobics (1): From a cross-cultural point of view. *Educational Sciences: Journal of the Yokohama National University*, **19**, 205-220.)
- 大西将史 (2007). 特性罪悪感と Big Five および共感性の関係 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 554.
(Ohnishi, M.)
- 大西将史 (2008). 青年期における特性罪悪感の構造——罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成—— パーソナリティ研究, **16**, 171-184.
(Ohnishi, M. (2008). Structure of the trait guilt in adolescents: Conceptualization of guilt and development of the Trait Guilt Scale based on psychoanalytic theory. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 171-184.)
- 大野 裕 (2002). 対人恐怖症と社会不安障害の類似点と相違点 樋口輝彦・久保木富房・不安・抑うつ臨床研究会 (編) 社会不安障害 日本評論社 pp. 113-125.
(Ono, Y.)
- 作田啓一 (1967). 恥の文化再考 筑摩書房
(Sakuta, K.)
- 里村 淳 (1979). ドイツと日本の対人恐怖症の比較精神医学的研究(補遺)——とくに“恥と罪”の問題について—— 臨床精神医学, **8**, 1343-1350.
(Satomura, A. (1979). A crosscultural study of anthropophobia between Germany and Japan (supplement): With special reference to “shame and sin”. *Japanese Journal of Clinical Psychiatry*, **8**, 1343-1350.)
- Shlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- 菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか——羞恥と自己イメージの社会心理学—— サイエンス社
(Sugawara, K.)
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262.
(Tani, F. (1997). Ego identity and anthropophobic tendency in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 254-262.)
- 内沼幸雄 (1977). 対人恐怖の人間学——恥・罪・善意の彼岸—— 弘文堂
(Uchinuma, Y.)
- 内沼幸雄 (1990). 対人恐怖 講談社
(Uchinuma, Y.)

——2007. 10. 13 受稿, 2008. 3. 1 受理——